

もう一度ゼロから サイエンス

連載
043回



科学作家
Kaoru Takeuchi
竹内 薫

20年後の
できる人たち
人工知能の未来 その3

技術的特異点とは、人工知能が人類より「頭が良く」なってしまう、われわれが置いてけぼりを食う状況を指している。そうなれば、職業が失われるどころの話ではない。世界が人工知能に支配されてしまうかもしれないのだ。

実は、ほとんどの人工知能学者は、このような暗い未来が到来するとは考えていない。

人類は、これまで3回の産業革命を経験してきた。

最初の産業革命のとき、機械が人類を支配すると思われたが、その後、人類は機械と共存しており、機械に支配されてなどいない。

第2次産業革命は、アメリカのフォード自動車に代表されるベルトコンベア式の大量生産を指す。チャールズ・チャップリンの「モダン・タイムス」はこの時期の風刺だと考えられる。

そして、第3次産業革命は、日本を中心とするエレクトロニクス革命を指す。チャップリンの警鐘をどうとらえるかは議論の余地があるが、第2次と第3次の産業革命は、人類の生活を豊かにし、われわれはベルトコンベアやエレクトロニクス機器に支配されてな

どいがない(ゲームをやりするのはいけません!)。

だったら、インターネットや人工知能を駆使した第4次産業革命が到来しても、われわれは彼らとうまくつきあい、共存していけばいいだけの話ではないのか。ただし、そのためには、来たるべき人工知能社会を生き抜くことができるような子供を育てていく必要がある。

私は今、全国各地に「未来小学校」を設立すべく奔走中だ。実は、私の父方の一族は岡山県で、代々、小学校の先生をしてきた。子供のころ、私をかわいがってくれた伯母も小学校の先生だった。小学校が身近なだけに、小学校の現場の先生方には共感と尊敬の念を抱いている。だが、今、学校の先生の中には鬱状態で休職に追い込まれている人も多いし、(前にも連載で触れたが)算数の掛け算の「順序」にこだわる奇妙な教え方が横行しているし、コンピュータ教育に至っては、ほとんど機能していない。

このままでは、日本の公立小学校は、20年後に到来する「計算世界」を生き抜く人材を育てることができないだろう。

だから、私は、自分で未来を見据えた小学校を設立することにしたのだ(この話は、これから文科省に持ち込む話なので、いずれきちんと報告したい)。

20年後、今の小学生が社会に出る頃には、スマホが超小型化され、場合によっては人間の脳と直結され、そこに組み込まれた人工知能と、あらゆる物事を相談しながら生きていくことになるだろう。

プログラミング好きの小学生は、大人になっても、コンピュータを「良き相棒」ととらえるから、人工知能を便利に使いこなすにつ、力強く生きていくにちがいない。人工知能の仕組みを知っている彼らは、「おい、相棒、おまえはそう言うけれど、人間には直観つものがあるのさ」などと、

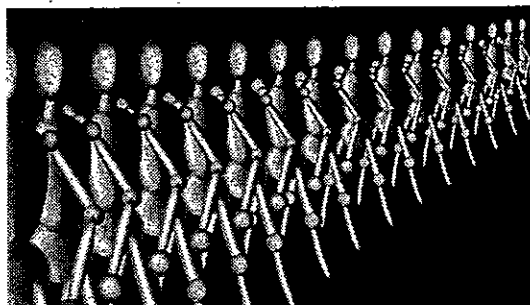


Illustration 山田博之

人工知能を軽くないし、まるで友達のように接し、結果的に「計算系」の人間として生き残るのである。

だが、今から20年後、人工知能の原理も知らず、進化し続けるインターネットに翻弄されてしまうような人間は、人工知能とやり合うどころか、おそらく言いなりになってしまうだろう。非計算系の人間は、未来社会において「考える」作業から切り離されてしまう。実に恐ろしいことである。(シリーズ完)